



石川祐希

復活。 いや、まだその表現は早い。 快進撃。 確かに。ここまで戦えるとは思わなかった。

文／田々子
写真／藤久



福澤直



石川祐希

2008年の北京五輪以後、2大会五輪出場を逃がし、10年には世界選手権出場を逃した。低迷の時代、とか、暗黒の時代、とか。日本の男子バレーボールを語られる時、定型文のように同じことを聞かれ続ける。「どうせ、男子は勝てないんじよ」と、世界の勢力図を見れば、女よりも男子のほうが圧倒的に世界で勝つのは確しいのは確かだ。何しろ相手は上背で勝り、力で勝り、技や経験で勝る。いつまでも過去の栄光をひけらかし「細かい技術は日本が上だ」と根拠のない主張を繰り返す時代はとくに終わって、だが今、日本の男子バレーボールは、そんな底から、這い上がった。16年のリオ五輪を逃がした翌年、中垣内祐一監督が指揮を執り、新たな日本代表がスタート。長年の低迷で失いかけていた「自信」と「知識」を手元にしたのがコーチに就任したフ

イリッパ・ブランド。かつてフランス代表として現役時代をプレー、その後欧州各国のクラブチームで指揮を執り、母国フランスの監督を務め、ポーランド代表でコーチを務めた14年には世界選手権を制した。凝り固まった伝統や経験ではなく、今、世界はどのように戦っているのか。広いビジョンで未来を語るブランドの戦略が、勝つことに傾いていた日本選手にタタリとハマる。17年のワールドグランプリでイタリアを倒す。18年の世界選手権は苦しい結果を残せず終わったが、それでも悲観する要素は一切なかった。決して楽観ではなく、今何をすべきとして戦っているのか。その「形」が明確で、間違いないオレレンジの過程にあることが見える。そんな期待を感じさせたからだ。そしてその期待が、願望ではなく、現実にな

ったのが19年のワールドカップだった。勝利のために攻める、ミスやリスタを恐れずサーブで攻め、主導権を握る。文字にすれば至ってシンプルな。だが勝つためには必要不可欠な方程式の中心でエースとして君臨したのが石川祐希。中大1年時の14年に日本代表に選出され、在学中からイタリアセリエAでプレーし、卒業後は大分がそうであるように日本のVリーグへ進むのではなく、石川はプロ選手としてイタリアへ渡った。もともと攻撃力に定評はあったが、その能力の高さゆえ、身体に負荷がかかり、大学の学中はケガも続き、満足なシーズンを通せることがなかった。だがプロ選手となり、生じる責任はすべて自分に降りかかる。あえて厳しい環境に身を置くことに加え、これまで

本代表を牽引する。そしてその背を追い、世界という広い舞台で急成長を遂げたのが19歳のオポジット、西田有志だ。サウスポインから放つ強烈なスパイクと、世界ナンバーワンの称号を得たサーブ。勢いの中に緻密さも備える西田の活躍が起爆剤となり、重ねる勝ち星の数だけ強くなる。光ったのは眩い若さだけではない。美しく上昇する成長曲線を、目立たぬ場所を支えたのが福澤直哉。右膝の大怪我から復帰を果たし、3年ぶりに日本代表に選出された清水邦広と共に、北京五輪に出場した。ロンドン五輪で銅メダルを獲得するなど女子バレーが光の中で取り上げられるほど、影の中で、男子バレーの低迷期を歩み続けた。だが、その古い経験から新たな武器を見出し、白らの果たすべき役割を見つけた。サーブで主導権を握ることが勝利の方程式で

ある世界のスタンダードとされる今、福澤のサーブレシーブは日本代表の生命線だった。世界1位のブラジルにも真つ向勝負を挑み、敗れはしたが「あのブラジルを倒せるかもしれない」と確かな期待を抱けるほど、日本の男子バレーボールに高揚感が戻ってきた。そして結果は12チーム中4位、五輪予選の合間でも主力を欠きチームも多忙だったとはいえ、近年と比べれば内容も件う好成績だ、と見る者が多い中、こんなところで褒めてくれるなとばかりに石川はこう言った。「メダル獲得を目標としてきたので、その結果が出せなかったことが悔しい。満足よりも悔しさがありません」復活、と言うのはまだ早い。目指す場所は、もっと先。まだまだ、日本男子バレーボールは強くなる。決して期待でも、願望でもなく、そう信じている。



清水邦広